東京の天理教

天理大学附属天理図書館
天理教文献室
早田　一郎　*Ichiro Soda*

東京にはいつ頃、誰によって天理教が伝えられたのだろう。上原佐助と中野政治郎は明治20年より前に東京布教したようだ。確かではないが鴻田忠三郎、吉本八十次、諸井国三郎などはもっと早くに布教したかも知れない。

鴻田は明治15年新潟に布教し、その帰路東京を経て奈良へ帰った。東京にとどまっていた期間は不明だが布教したかも知れない。可能性の話である。吉本は8月号に触れた通り、東京から大阪への帰路、静岡県へ信仰を伝えた。やはり東京滞在中に布教したかも知れない。もう一人、諸井は明治18年に埼玉布教に赴いた。埼玉の行き帰りに東京で布教した可能性がある。

上原佐助の話を始めよう。岡山県笠岡出身であったが叔父を頼って大阪の人となり、畳商を継いだ。明治13年に入信。翌年教祖にお目にかかり信仰を深め、明治18年になって東京布教へ旅だった。

上原の布教は下谷金杉下町に始まり、やがて遊郭のある吉原に伸びた。そこで遊女など社会の底辺に苦しむ人たちをたすけ、遊郭楼主も有力な信仰者になっていった。

明治21年、東京において一時の教会本部が設置された時、上原をはじめ中臺勘蔵など在京の信仰者が大きな働きをした。その後上原は東分教会を、中臺は日本橋支教会を設置した。

日本橋の他、現大教会である牛込、浅草、さらに芝、京橋、谿郷などの分教会初代も上原によって信仰に導かれた。また深川大教会初代は教会本部設置のためおぢばから出張していた人の話を聞き入信。いずれも東系統の教会として発展する。

明治29年末、東京には39カ所の教会ができていた（筆者の調査、以下同）。そのうち上原を中心に始まった東系統の教会が25カ所で全体の約3分の2を占める。明治20年代は東系統の伝道が東京の各地に広まり、他系統はまだ多くなかった。

明治30年以降はどうであろう。教勢倍加運動を終えた後の大正15年末、東京の教会は553カ所に増えていた。引き続き東系統が最も多い。東、日本橋、牛込、浅草、立野堀、深川、阪東に繋がる教会が142にのぼり、全東京の4分の1強にあたる。しかし、明治29年末時点より割合が小さい。その他の系統教会が増えたためである。

他の系統で東に続くのは東本系統である。東本ほか本保、本芝、本荏、本理世を合わせると大正15年末時点で77カ所になり、全東京の14パーセントになる。東本の元は大阪の南大教会、さらにその元は高安大教会である。東本系を除く東京の高安系統は都大教会を含めて38カ所あり、東本系統と合わせ115カ所、全東京の5分の1を越える。明治29年末に高安、東本系統の教会は1つもなかったが明治30年以降、急成長した。

東本大教会は兵庫県丹波赤熊の中川よしに始まる。よしは明治23年、松永好松（後の南大教会初代会長）の話を聞いて入信、猛烈なおたすけを開始した。病人のおたすけは人が止めるほど壮絶で死人が生き返ったという。死んだ人が生き返ることはない。死の淵から生還した人がいたということだろうか。

明治29年、よしは東京布教を志し上京した。内務省訓令が発令された直後で布教は困難を極めたが、よしの真剣で捨て身のおたすけにより入信者が続いた。

赤熊に一時帰った時、たすけた人たちがその後けっして順調な信仰生活を送っていない様子を見て、その後のおたすけが変わったと言われる。つまり、身上たすかりばかりを神様に願い、たすけた後の仕込みをおろそかにしたとの反省である。再び東京でのおたすけを開始したよしは弟子たちを厳しく仕込んだ。本芝大教会の基礎を築いた白木原明吉、明代夫妻などがよしの仕込みを受け、伝道者として育っていった。赤熊と東京でのおたすけの違いは天理教が身上たすけにとどまらず、その人をおたすけ人に育てることに重要な意味を持つことを如実に示している。

東本大教会を元とする大教会は現在東京に本保、本芝、本荏、本理世とあり、愛知にも本愛大教会がある。教祖の「ひながた」に感激し、「たすけのおよし」とあだ名された中川よしの東本は急激に東京に教会を増加させていった。

東京において次に多くの教会を有しているのは麹町系統である。麹町からは大森町と錦江大教会が誕生する。明治29年末には麹町1カ所であったが、大正末には39カ所に増えた。

麹町は大阪の北大教会の流れをくむ教会である。北の東京布教は豊岡系の岸本唯之助により始まった。信者が増え、麹町支教会を設置、北の理事上田善兵衛が初代会長に就任した。ところが上田は明治30年の水屋敷事件に加担し免職となってしまう。その後を久保治三郎が受け奮闘の末、教勢を持ち直すことができた。しかし、内務省訓令も重なり麹町系統の教会が増え出すのは大正期に入ってからである。

麹町初期の信仰者には開運修行の一つである淘宮術の仲間が多かった。天理教の話を聞くようになると、術によって自分の運勢を開くより、天の理を知ってこそ人の心や世の中の真理が分かるとこぞって天理教に入信したという。

大正12年9月1日、関東大震災がおこった。ちょうど教勢倍加運動の最中で、この年の1月から8月にかけて東京に50カ所近くの教会が誕生していた（教会本部お許し）。しかし9月以降12月までの4カ月に7カ所が設立（筆者調べ）されたのみであった。震災の影響がいかに大きかったかが伺える。

平成24年現在（立教175年）、東京の全教会1,129カ所のうち、東系統、東本を含む高安系統、麹町系統の教会を合計すると、690カ所になる。実に全体の61パーセントを占めている。

ところで東京の全教会が所属する大教会は117カ所にもなる。現在大教会は全部で159カ所、したがって全体の4分の3の大教会が東京に少なくとも1カ所以上の教会を有していることになる。日本の首都である東京に多くの教会が意図的に布教師を送り込んだ結果ではないか。

『みちのとも』大正6年2月号の「東京布教の研究」には「（この当時）東京布教を企てる人が非常に多く、単独布教師が全国の教会から300人来ている」と記される。首都東京に布教師を送り込んだのは全国へ伸び広げようという思いの現れであると考えていいのではなかろうか。

東京に始まった教会はさらに東京だけにとどまらず、関東一円に伝道線を伸び広げていくことになる。

［注］筆者調査の教会数は『天理教教会所在地録』などによった。移転などのため、若干の誤差があるかもしれない。